

〔パネル討論〕

「子どもたちが輝く社会とは」

景井 第2部を始めたいと思います。司会を荒木先生にお願いいたします。

荒木 みなさん、こんにちは。第2部のコーディネーターを務めさせていただきます荒木です。

第2部のパネルディスカッションに入らせていただきます。冒頭で学部長が、来春新しくできる子ども社会専攻、小学校教員養成課程について触れましたが、産業社会学部で子ども社会専攻を展開していく上で、どういう問題視角を大切にしていくか、この間、ずいぶん議論をしてみました。その中で「子どもたちが輝く社会とは」いう、コンセプトを考えてみました。このコンセプトは時代を越えたあたりまえのことではないかといわれるかも知れません。しかし、あたりまえのことをあたりまえに言うということが、実は今の社会の中では大事ではないかと考えて、こういうテーマにさせていただきました。基調講演をいただいた、陰山先生やパネリストの先生方と事前の打ち合わせをさせていただきました。大きな世界史の動きの中で見ると、ここ100年、50年の単位で見ると、大きな流れとしては子どもたちの権利が守られ、さらに発展しつつあるといえると思います。子どもたちが輝く社会が実現しようとしていると言えるかと思います。

他方、陰山先生の基調講演の中にもありましたようにさらに現実に分け入ってみると、決して子どもたちが幸せに暮らしていると言えないような現状が日本の中にもあります。世界に目を向けると命も危ういような状況が現実に存在しますし、広がっていてもいます。そういうことも含めて、今、我々に何ができるか、どういうふう子どもたちが輝く社会にしていくのか、子どもの視点から社会を見るということは、どういう意味があるのか、これらを今日の第2部のパネルディスカッションでは深めていきたいと思っています。

陰山先生は基調講演の中で「教育の再生と言われるけれども、それは実は私たちの生活の再生とつながっているのではないか」という指摘をされました。「現代の子どもを読み解く時のキーワー



ドとして、依存・競争ということをもっと徹底的に考えてみてはどうか」という問題提起もありました。この点にも留意してパネルディスカッションで議論していきたいと思えます。依存、競争ということに加えて平和、安心、安全、命、子育てや子育て支援の問題、それらを「学ぶ」「教える」ということとつないで、どう考えていくか。これらを今日のパネルディスカッションで議論できればと思っております。

ここでパネリストの紹介をさせていただきます。陰山英男先生は立命館小学校副校長および立命館大学教授をされています。陰山先生には基調講演に続いてパネリストとして残っていただいております。次は産業社会学部教授で応用人間科学研究科長の高垣忠一郎先生です。3人目は来年度4月から産業社会学部子ども社会専攻に着任していただく予定の大谷いづみ先生です。最後は読売新聞編集委員の野間裕子先生です。4人の皆さん方でパネルディスカッションを進めさせていただきます。

パネルディスカッションのすすめ方ですが、まず、高垣先生、大谷先生、野間先生の順に、3人の先生方から問題提起をしていただき、最後に陰山先生から3人の先生方からの問題提起に応える形で発言をしていただきます。各先生方に質問していただいても結構です。それを受けまして、2順目の発言をお願いしたいと思います。その後、フロアの皆さんも含めて全体の討論をさせていただきます、まとめをしていきたいと思えます。それでは早速、高垣先生から問題提起をお願いします。

高垣 こんにちは。陰山さんのお話はとても面白かったです。もうちょっと続けてほしいなという



う感じでした。最後のところで「教育って何のためにあるのか。自分で飯が食えるようになる、働くことができる人間になるためだ」と。大賛成ですが、それに一つプラスしてほしいのは「愛することができる」。大人になるというのは「働くこと」と「愛すること」、この二つができるようになることだと思います。陰山さんは学力と体力の話をなさったんですが、

我々は臨床心理の仕事をしておりますので、心の問題についてお話をさせていただきたいと思えます。私が30年来、取り組んできました登校拒否や不登校の子どもの問題について焦点をあてながら、それを切り口に心の問題についてお話をさせていただきたいと思えます。

先程の陰山さんのお話の中で、大きな日本の社会の変わり目、30年前ということがありました。1970年代半ば頃、日本の社会の一つの大きな変わり目になっている。不登校や登校拒否の世界でもそうでした、60年頃から不登校、その頃は学校恐怖症という言い方をしていたんですが、そういう

子どもたちが日本の社会に出て来始めてまして、60年代に増えてきたわけですが、それがやや緩やかですが、ちょっと減ってきたような時期が70年頃にあります。それがまた上昇に転じたのが30年前、70年代半ば頃からです。1973年、オイルショックのことも陰山さんのお話になりましたが、73年のオイルショックを契機にして日本の社会が右肩上がりの高度成長が陰りを見せまして不況の時代に入っていった。それと機を一にするように不登校・登校拒否の子どもたちの数がグングンと増え始めました。私はその頃からこの不登校・登校拒否の問題にかかわってきています。30年、この問題にかかわってきているわけですが、なんでその頃に不登校の子どもたちが急速に増え始めたのか。陰山さんのお話にもありました。競争原理が深く教育や子育ての世界にまで浸透してきたということなんだろうと思います。

それに伴って子どもたちの生活が私の言葉で言いますと「高速道路」になっていった。丁度、70年代半ばから教育の世界では何が言われたか。「受験フィーバー」。そういう時代が始まったんですね。それはどういう形で現れているか。それまでは受験雑誌にしか載らなかったような記事が一般の週刊誌にまで載るようになった。その記事はどんな記事か。東京大学への合格率高校ベストテンとか、ランク記事が出始めたのがその頃です。受験競争が激しくなっていった時期です。それと軌を一にするように不登校の子どもたちが増えていった。不登校・登校拒否の問題というのは、日本の社会の競争原理の浸透と切り離して考えることはできない。先程の陰山さんのお話の中にもありました。

そういう背景の中で教育や子育てが、子どもに「脅し」をかける子育てや教育になっていったのではないかと思います。一言で言いますと親、教師の期待に応える、「いい子」じゃないと見捨てるぞという脅しをかけて子どもたちを走らせる。そういう子育てや教育にいつのまにかなっていったのではないかと思います。「お前は父さんの期待通りの学校に行かなかったら見捨てるぞ」などは、普通の親はあまり言わないだろうと思います。親の期待に応える「いい子」じゃないと見捨てるよということ、口では言わなくても、大体こういうことは目で言ってるんですね。子どもは小さいければ小さいほど親に見捨てられたら生きていけませんので、一生懸命親の期待に応えようとして頑張って、「いい子」になろうとする。不登校・登校拒否の子どもたちの中にも小さい時から「いい子」だったという子どもたちが少なくありません。そういう子どもたちが思春期あたりで学校に行けなくなっていくことがとても多いわけです。それは一面では親の期待通りルールの上を走ってきた「いい子」のあり方という自我に目覚めて親離れをしていくわけです。親の敷いたルール離れをしていく。そういう意味では、登校拒否・不登校は親からの「独立戦争」になるという意味も含んでいるわけですけど。だから不登校・登校拒否になること自身は決してマイナスの意味ばかりを持っているわけではない。そのことをきっかけにしてプラスに転化していく意味も持っていると思います。それを手伝うのが私たちカウンセラーであり、親であり、教師であるわけです。

そういう子どもたちが元気になっていく上で一番大事なものは「自分が自分であって大丈夫」という「自己肯定感」なんです。これが心の中に膨らんでくることが、子どもたちが元気になっていく上でとても大事なことなんだというふうに30年間、言い続けてきたし、本にも書いてきた。ところ

が不登校になった子どもたちの多くは当初、どんな心境に追い込まれているか。皆、あたりまえに学校に行っている。でも自分だけ学校に行けない。「僕は情けない子どもや。私は弱い子どもや」と自分を責めたり、自分を否定したりしているわけです。皆さん、自分の心に問い掛けてください。「私はだめな親だ、私はだめな教師だ」と自分を責めまくっていて、自分を否定しまくっていて、果たして元気に自分の成長や人生に向かってチャレンジしていただけますか？「私はだめだ、だめだ、だめな人間だ」と自分を否定したり責めまくっていて元気になるという人がいらっしやったら、ちょっと手を挙げてください。そういう方いらっしやったら後でゆっくりお話を伺いたいなと思うんですよね。いらっしやらない。人間が元気に人生や成長に向かってチャレンジしていくためには、心の中に「俺が俺で大丈夫だ」という安心感、自信が基地のようにないとだめなんです。それを不登校・登校拒否の子どもたちは奪われている。これ不登校・登校拒否の子どもたちに限らない。今、多くの子どもや若者たちがそういう心の状況に追い込まれているのではないかと。自分が自分であって大丈夫でない、自分が自分であってはだめなんだという、そして自分は誰か、別の他人にならないといけなとみたくに思わされて走っている。そういう子どもや若者たちがカウセンリングの世界から見るととても多いように思います。カウセンリングの世界だけではなく大学生とつきあっていても、そういう印象を受ける。自分の人生をしっかりと生きる主人公になっていくためには、「自分は自分であって大丈夫」という自分を支える自己肯定感は心の中にきちんとなければ、とてもしんどいんじゃないかなと思う。

陰山さんの話では「基礎学力ということが大事だ」と語られました。学力、体力の面で特に焦点をあてて語っていただいたんですが、私は「心の基礎学力」として「自分が自分であって大丈夫だ」という、自己肯定感を位置づけたいなと、先程の陰山さんの話を聴いていて思いました。これが育っていない、膨らんでいない、発見していない、そういう子どもや若者たち、それがとても気になるわけです。不登校になると不登校という状況が、「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感を崩していくような状況になっているということでもよくわかりますが、それだけでなく「心の基礎」みたいなものがしっかりと膨らんでいないんじゃないかなと思うような子どもや若者たちが多いように感じる。その背景には何があるか。「魯しの教育」「魯しの子育て」「競争原理に煽られた、比べる子育て」「比べる教育」。この「魯し」と「比べ癖」の教育や子育ての中で、「自分が自分であって大丈夫だ」という自己肯定感を膨らますことができなくて大きくなってきている。そういう子どもたちが今、日本の社会の中にとっても多くなっているんじゃないかなと思うんですよね。

もう一つ今日、ぜひ皆さんに考えていただきたいのは、立命館の教学の理念は「平和」と「民主主義」なんです。私は今、応用人間科学研究科で仕事をしていますが、この研究科は、教育、福祉、臨床心理、看護の領域で、課題やしんどいものを抱えている方を援助する専門家を育てる大学院です。そこで対人援助の専門家を育てる、立命館で育てる対人援助の専門職ですから平和と民主主義を日々の実践や仕事の中に貫くことができる専門家を育てたいなと私個人は思っている。子育てや教育も立派な対人援助の仕事ですよ。子どもの成長や発達を援助するんですから。その子育てや教育の中に平和を貫くというのはどういうことか。平和の対極にある戦争は武力で魯しをかけて

相手の国を支配する。そういうことですから、その対極にある平和は人間が脅しで支配されない、そういう状態だと少なくとも思います。平和を子育てや教育の中に貫くことはどういうことか。「子どもを脅しで支配しない」ということです。子どもを脅しで動かさないということです。

ところが周囲を見渡すと脅しが罷り通っているのではないかと思うんですね。学校で子どもを教えている先生自身が脅されている。校内研修で話に来てくださいと呼ばれて行くことがあるんですが、テーマは不登校・登校拒否です。学校に行ってお話をする時、必ず、私は最初に聞くことがあります。「先生方、のっけから失礼な質問をさせていただきますが、先生方自身、学校に来るのが楽しいですか？」とお聞きします。何人の手が挙がると思いますか？ 小学校、中学校、高等学校、何人の手が挙がると思いますか？ 一人か二人です、どこへ行っても。それもオッチョコチョイみたいな先生が手を挙げてくれる。せっかく講師がこういうふうにいるから誰も手を挙げなかったら愛想がないんじゃないかとサービス精神の旺盛な先生が手を挙げてくれてはるのかなと思うような感じです。一人か二人です。先生方、子どもたちの笑顔を思い浮かべたら「今日も勇んで学校に行こうか」という気持ちになるけど、でもね、「いざ玄関を出掛けると、何やら心に暗い影がさしてきて『いや、今日は行きたくないな。もう行くの、いややな』というふうにするような日が時々あるという方、先生、手を挙げてください」。何人、手が挙がると思いますか。少ないところで3分の1は挙がる。多いところはほとんど手が挙がる。しかもその手の挙げ方で学校の雰囲気わかる。周りの様子を伺いながらそっと手を挙げたり、校長の顔を伺いながら手を挙げたり。「この学校はわりに自由な学校やな、ここは管理がきついな」というのがわかるんです。そんな調子です。先生自身もう学校に行くのがいやになることがある。そういう教師の方が圧倒的に多い。そんな学校に子どもだけが楽しく通えるはずがないでしょ、そこから話をするんです。

不登校・登校拒否の問題は向こう側にいる特別の子どもの問題だと思っている先生方がまだいらっしやるわけです。違う。これは先生方も含めた問題だと。その先生方は、はいずるようにして学校に行っているから、休む子どもが出てきますと、ついつい「先生がこんなにしんどいのに、頑張っている学校に来てるのやから、お前も頑張れ」。こういう子どもに対する対し方になってしまうんですよ。陰山さんのお話にもありましたように、日本の教師は頑張っている。心が引きつっている。クタクタになりながらも子どものことを一生懸命面倒見ている。教師たちがもう少しゆとりを持って子どもを向き合えるような教育行政をやってほしいと思いますね。先生の心が引きつっていて、なんの「心の教育」か、そう思いませんか？

荒木 高垣先生どうもありがとうございました。続いて大谷先生お願いします。

大谷 陰山先生の基調講演、高垣先生のお話を受けて、私は、高校教育で生命倫理という生と死の問題を立ち上げてきた経験から感じてきたことを主にお話させていただければと思います。大阪大学で臨床哲学を立ち上げられた鷺田清一先生の御著書に、『悲鳴をあげる身体』という本があります。その一節にこうあります。「何か少年や少女の事件が起きるたびに心のケアや心の教育がど



うのといった声上がるが、私はすぐにそういう発想がとれない。ちょっと乱暴かもしれないが、お箸をちゃんと持てる、膝をついて食べない、顔を真っ直ぐに見て話す、脱いだ靴を揃えるなどということができていれば、あまり心配はないのではないかと感じてしまう。あまのじゃくなわけではないが、とりあえず『ご飯は必ず一緒に食べるようにしたら』と言って

みたくなる。何か身体で学んだ判断を信じたいと思うのだ。これは、さきほどの陰山先生のお話にあった「早寝、早起き、朝御飯」というのと重なりあう言葉です。この本が出版された1998年当時、私は高校の教師をしていたんですが、とても納得しました。「ああ本当にこんなに単純なことなんだよね、こんなふうにシンプルなことなんだよね」と。その一方で、「本当にその通りなんだよね」と思いながら、鷺田さんのこの一節を読んだときに浮かんだのは、そうではない現実、物心ついたときからお父さんと一緒に夕ご飯どころか、ろくに話しをする時間もない現実のなかで育って高校生になっている、目の前の高校生たちでした。高校生を子どもということには抵抗がありますが、子どもでも大人でもない、思春期まっただなかの曖昧な存在と日々かわりあっていて、こんなに実は簡単でシンプルなことなんだけど、でもそうではない高校生たちを前に「そうは言われていられない現実、そうは言われていられない日々がある」ということでした。それは授業で見る高校生たちの姿であったり、休み時間や放課後の雑談でかわす会話だったり、その際のちょっとした表情だったり、職員室や保健室にやってきて、ひとしきり話をしたり、無言の言葉を全身で放つ高校生たちであったりします。マスコミが描く高校生の姿の一方で、決してメディアには描かれることのない生身の高校生たちの姿を思い起こすなかで、考えこんでしまったんです。

もう一つは代理出産や生殖技術、安楽死・尊厳死や脳死・臓器移植、出生前診断と選択的中絶といった「生と死の問題」、生命倫理の問題を授業の中で高校生とともに考えてきた20年間の彼ら・彼女らの変化です。20年前、私がこういった問題を高校の「現代社会」や「倫理」の授業の中で扱い始めた頃は、授業実践の先例ももちろんありませんでしたから、手さぐりでアメリカの裁判事例や日本の事例を報じた新聞記事を手掛かりに、まさに生徒たちと一緒に考えてきたといえます。試み始めた80年代後半の高校生とは違う変化が、この20年の中にあります。たとえば、胎児診断でお腹の中の赤ちゃんに重い障害があることが判明し、迷った末に中絶をするというような事例を取り上げたときのこと、プリントを配った瞬間、そのプリントが教室のすみずみに行きわたる前に、一人の男子生徒がプリントをわしづかみにして「先生、こんなこと許しちゃいけないよ」と立ち上がり叫びました。それが20年前の教室の光景でした。どんな生命であるかにかかわらず、まず、生

命それ自体を肯定する、理屈よりも何よりもそんな価値観が心身に刻み込まれている反応だったわけですが、今、そんな反応をする高校生が少なくなってきたように思います。

私が高校の教師を退き、大学院で勉強をし直そうという遠因になったエピソードをもうひとつお話しします。「尊厳死という考え方が社会に広く行き渡るようになったら、寝たきりのお年寄りや重度の障害をもつ人たちが、自分が生きていることを気兼ねするような、自分は生きてはいけなと思うような社会にならないだろうか」という問題提起の記事を題材に、「あなたはこれをどのように考えるか?」という論述試験をしました。すると、ある生徒が「そういう人たちが自らの意思で家族や社会の負担にならないように死んでいくことを選ぶように、社会が導き、支援することこそが進化した社会である」と答えて来ました。この回答は、私にとっては非常におおきな衝撃でした。

こういう反応の変化の背後には、高校生たちの生命観・死生観の変容があるからではないかと思えますし、社会の価値観の先鋭的な反映でもあると思うのですが、今日は「イマドキの子ども」の身体・生命現象から考えていることをいくつかお話させていただきたいと思います。

今の子どもたちの体力は中高年よりも高くないということは統計的にもよく言われることです。さまざまな学校がありますのでいちがいに言えないのですが、今、高校で盛んな部活というのはまず運動部です。私が教師になった四半世紀前にすでにそうになっていて、十歳も違わない高校生たちの違いにびっくりしたんですが、運動部と文化部の落差は年々激しくなっていました。文化部に入るとクライと思われてしまうから運動部に入る。どう考えたって明らかに文化系だよねというタイプの彼・彼女が運動部に入り、朝から晩まで汗を流して、土日も続く部活にハマりまくる。そこから外れたらテレビドラマのような学園生活を送るのに失敗したんだ、とでもいわんばかりの空気がある。土日なく続く肉体の鍛練という状態があって、ある種の脅迫観念にさえなっている。

茶髪やピアスでどうのこうのという時代ではなくなりました。身体改造ということでしょうが、他には、セックス体験の低年齢化とか援助交際といった身体をめぐる現象があります。「いのち」をめぐる現象については、現在は毎日の如くですが、子どもの自殺、子どもによる殺人がある波を持って話題になります。話題になっていないから起きていないのかというと、「話題にならないほど」という要素さえも、ひょっとしたらあるのかもしれませんが。こういった事件が起こるとよく言われるのが、彼らがゲームの中でリセット可能な生命観を育てている、という指摘です。ゲームやインターネットがやり玉にあげられる。そういう部分もあるのですが、しかし一方で、それが子どもたちのリアルな現実でもあるということです。それを踏まえなければ、原因と名指ししやすい、わかりやすいものを悪ものにして一安心して終わるだけではないでしょうか。

その背後にあるもの、子どもたちの「身体・生命現象」の背後にあるものを考えてみた時、過剰ともいえる「身体へのこだわり」があるのではないかと。過剰なほどの身体へのこだわりは、いわば手応えのある「モノとしての身体」、生命観が希薄化しているから、心が満たされないから身体で手応えを得ようとするんじゃないか、ということです。運動部の部活や学校行事が盛んな学校では、

高校生もとにかく忙しい。大人も忙しいけど高校生も忙しいんです。手帳を見るとびっしり予定が埋まっている。私が授業のなかで「身体が疲れると心が充実しているって勘違いするんだよね」とイヤミを言うと、そのイヤミを笑い飛ばせない。それくらいに、忙しさの中に、身体が疲れる毎日に何かを誤魔化している状況があります。それはいわば自分自身の「不在感」、何にも満たされていないという自分自身の不在感です。高垣先生のお話にもあった自己肯定感のなさを、そういう形で何とか埋めようとしているのではないかということでした。

モノの充実で生活を満たすことも出来ます。不況が長く続いたと言いますが、それでもモノは溢れています。溢れるモノで、満たされない何かを満たそうとする。「モノ」とは一つ、二つと数えあげていけるもの、つまり数値化できるものです。数値化できるもので自分の価値を測る。携帯に登録したアドレスやプリクラの数で、多くの友人とつながった自分の存在価値を確かめる。あるいは、より多くのモノ、より豪華なモノを持つことで、自分や他者を測る。それは、少しでもよい学校、つまりヘンサチの高い学校へ、よい中学校へ、よい高校へ、よい大学へ、人気のある給料の高い安定した会社へという、何か数値化された「よさ」で、その価値が測られるということにもつながっている。モノの充実を身体というもので測ろうと、保健室に運動部の生徒が毎時間のようにやってきます。何しにやってくるか。体調が悪いからでも部活で故障したからでもないんです。保健室にある高機能の体脂肪計で体組織を測りにきて「昨日はどうだった、今日はこうだ」と比べて、それで安心したり不安になったりしている。数値と結びついた健康強迫症、健康至上主義に何か自分自身の不在感を転化させているような感じがあります。

「自分の不在」とは何か。一人ひとりがかけがえのない存在というのは基本的にはほんとに大事なことだと思います。けれども、今や個性を持たなければならないと、逆にそれが強迫観念になってしまった。自分らしくあるということ自体が重荷にさえなっている。「自分らしさ」がツラさのもとにあるんじゃないか、そう感じるものがしばしばあります。陰山先生のお話を聴きながら、この20年の学校教育の変化を見ながら、高校生たちの変化が当てはまると思うのです。これも、ある生徒の言葉です。「僕らは『夢を追いかけろ』という価値観と『勉強ができなきゃダメだ』というふたつの価値観に引き裂かれている。どっちも正しくて、どっちかを選ぶのはむり。どっちも半端で、どちらに絞っても『これでいいのか』と不安で、不安から逃げられない」と。

子どもたち、若者たちは「あなたはかけがえがない人だ」と言われ、「自由な時代だからあなたの未来はあなたが選びなさい」と言われて育っています。でありながら、「でもね、大学には行ってね。できれば[もちろん]、ちょっとでもよい大学にね」というメッセージがカッコつきで無言の圧力を放っている。そんななかで引き裂かれて不安に駆られている子どもたち、高校生たちの姿がここにはある。そして、その不安を受け止める関係というものが、世の中からなくなってしまっています。つまり、「関係の不在」です。子どもの不安を受け止める親子の関係、親から叱られた時にそれを受け止め合うきょうだいの関係、友だち同士の関係、そこで親とは別のことを言う、あるいは親と同じでも別の言葉で語るご近所のおっちゃん、おばちゃんだったり、親戚のおじさん、おばさんだったり、おじいちゃん、おばあちゃんだったりという関係、そういうものがなくなってしまっ

ているのではないでしょうか。

こういう状態の中で、「心と身体の不安全感」がどこに向けられていくか。何が心と身体の不安全感を受け止めているか。その不安全感を回収しているのがカルトです。突拍子もないと感じられるかもしれないませんが、高校や大学では真剣に考えなければならないことだと思っています。オウム事件が起きた時、事件を起こした若者たちは、ひょっとしたら「倫理」という授業が好きだったようなタイプにも思えましたし、事件を起こした若者たちが、誰もが目指しているような大学や大学院の学生や卒業生だったという事実を前に、私は教師として自分の生徒たちに何が為せていたのだろうか、これから何を為せるのだろうかと考えざるを得ませんでした。事件後も、断続的にカルト事件が続いています。最近話題になっているカルトでは、スポーツサークルを装って学生を集めています。——とすると、家庭や学校が提供しえなかった人生のわかりやすい「正解」や安心感、不安を受け留める「関係」という装置を、彼らが代わりに果たしてしまったのかもしれないということなんです。

ではどんなふうを考えてゆけばいいのか。子どもの現象は大人社会の反映であるというのが、最も考えたいことです。子どもの苦しさの背後には大人の苦しさがある。家庭が大事だと言われた時、一番苦しいのはもちろん子ども本人ですが、たいていは親ごさん自身も苦しんでいます。何か問題を抱えている時、あるいは、学校にとりあえず来てはいるけれど、でもちょっと心配だなという時、親御さんに学校まで来ていただいたり家庭訪問しますね。その時、最初にお話をするのはたいていはお母さんです。ここで橋渡しをさせていただくとすれば、そのお母さんが抱えている苦しさも含めて、この後、野間先生にお話しいただけるのではないかと思います。

荒木 大谷先生どうもありがとうございました。身体、身体性の問題と心の問題について深めていただけたのではないかと思います。続いて野間先生お願いします。

野間 今日は教育の専門家の方とご一緒に並ばせていただいておりますが、教育は専門ではございません。家庭面をずっとやっておりまして、私の子どもが小さい時代はともかく、最近は、そんなに子どものことを取材していません。むしろ高齢者の取材が多くて、2000年に介護保険が施行されるまでは高齢社会の問題や終末期医療のことなどを主に取材してきました。そういうわけで、今日は陰山さんのお話をはじめ、皆様のご発言に勉強させていただくこ



とばかりです。これからの仕事に、新たな視点をいただいたように思っております。

読売新聞は、2001年に「よみうり子育て応援団」を発足させております。これは若い子育て中のお父さん、お母さんを対象にしたシンポジウムです。その企画を5年間担当してきました。そこで今日は、お母さんたちの置かれている状況について、乳幼児のいる家庭の問題、若いお父さん、お母さんの問題を子育て環境の視点から述べさせていただきたいと思います。高齢問題というのはずいぶん前から言われていたのですが、メディアで盛んに言われるようになったのは90年代からです。2000年に介護保険ができたわけですが、高齢化が日本でなぜ問題かと言うと、非常に早いスピードで進んでいるからなんです。日本が「高齢化社会」と言われたのは1970年代です。その時の高齢化率、全人口に占める65歳以上の人口は7%でした。それが90年代になり14%を超える。国連の規定で、14%を超えると「高齢化社会」から「高齢社会」と呼び方が変わります。その期間が日本は24年間でした。7%から14%になるのにヨーロッパの国々では100年以上かかっている。早い国でも50年前後だったのが、日本はさらに、その半分のスピードで高齢社会になった。これは大変だ、どのように対策を立てればいいのかと、あわてて議論されました。2000年には介護保険ができたわけです。

これを裏返してみますと、少子化が進んでいて高齢化が進んでいたわけです。高齢者だけが一方的に増えていたわけではない。他方で子どもの数が減ってきて、相乗的に高齢化率を急速に引き上げたわけです。なぜ子どもの数が減っているのかということが今、問題になっています。一つは「非婚化」で、結婚しない人が増えた。「晩婚化」、つまり結婚を遅らせる傾向もある。今は30代前半でも結婚しない人が多くなっています。もう一つが結婚はしても子どもを持たない夫婦が増えてきていることです。結婚しない人、なるべく遅く結婚する人。結婚しても子どもは持たないで、夫婦二人で人生を楽しみましょうと言う人たちが増えている。これが日本の少子化の原因であると国の研究機関は分析しています。それでは、なぜ結婚を遅らせたり、子どもを持つという選択をしなくなっているのでしょうか。もちろん複合的な原因があるのですが、母親、女性の生き方と関連して考えてみると、女性たちが結婚しない、母親を選択しない理由がいくつか浮かび上がってくるかと思えます。

高学歴の女性が増えています。大学を出てばりばり仕事をしていても、結婚はともかく出産で会社を辞めなければいけなくなる。辞めずに仕事を続けられても、育児休業など取って中断すればキャリアを重ねることができない。職場で不利な扱いを受ける。仕事を続ける上で出産、子育てが大きな負担になる。辞めてしまって専業主婦で子どもを育てるという選択もあるわけですが、この場合も逸失利益、その間ずっと働いていたら得るであろう、所得を含めた損失が大きなものになっている。しかも日本は再就職が難しい社会ですから、一旦辞めてしまうと、また同じ条件の仕事に戻ることがなかなかできない。そういうことから出産、子どもを持つことをあきらめたり、先伸ばしにするようになっている。そうしたことが少子化の一つの要因だと思われれます。さらに、子育て費用がかかるとか、ニートとかフリーターとか不安定な労働についている若い人が増えている中で、家庭を持つという安定した将来像を描けないということもあります。また、子どもが被害を受ける

犯罪も多発しています。ひきこもりとか、いじめとか聞くと、「子どもを持てばこんなことで悩まなければいけないのか」という気持ちになる。出産を躊躇う、いろんな理由がある。今、出産、子育てをリスクと考えるような風潮が大きくなってきていると思います。

今年、国勢調査の結果で日本は2004年が人口のピークであったと分かりました。2005年から人口減少社会に入っている。もうおそらく回復しないだろう、減少し続けるだろうと言われていました。このままいきますと20年後に、600万人の人口が減っていく。600万人というのは千葉県の人口くらいです。しかも20年後と言うとそんなに遠くない将来ですね。この会場にいる皆さんは、大体、生きてらっしゃるのじゃないかと思います。私も生きていますつもりですけどね。その時に千葉県の人口そっくりいなくなる。しかも補完されるべき若い人がいなくなると考えた方がいい。高齢になって亡くなる人が600万人ではなく、それを補完する子ども・若者が600万人いなくなるというイメージかもしれないと思うんです。結婚して子どもを生み育てることは、人間がこれまでごく自然な気持ちでやってきたことだと思いますが、それがなぜ超スピードで人口が減少するほど子どもを持たない時代が進行しているのか。これは異常な事態ではないかと思います。「日本は人口が多いので、少しぐらい少なくなってもいいじゃないか」という意見もあります。ただこれだけのスピードで子どもが減っていくことは、この社会に問題があるのに違いないと思うのです。

子育てが困難になっていることも大きな問題です。原因は子育て環境が変化したことにあります。毎朝、NHKの連続テレビ小説を見ている。今、作家の田辺聖子さんをモデルにした「芋タコなんきん」をやっていますね。このドラマは高視聴率だということですが、田辺さんのご生家が写真館ということで、曾祖母、祖父母、両親、叔父や叔母、きょうだい、写真館に勤める人、これだけの大家族が一つ屋根に住んでいた。子育てを考えると、ほんとにそんな家庭って、いいなと思って見ているのですが、でも当時は珍しくはなかった、昭和の時期、戦前の話ですが、結構あったんじゃないかと思います。農家などはきっとそうでしょうし、商家もそういうお宅は多かった。大家族でなくても、周りにたくさんの人がいる中で子育てをして、子どもが育った。ところが、今はそういう環境がなくなったということですね。

現在、幼児のいる核家族世帯は約80%ですね。8割は核家族で育てているわけです。夫婦二人で子どもを育てているわけです。おじいさん、おばあさんどころか周りにだれも助ける人がない状況の中で育てている。ところが実質的には夫婦二人でもない。お母さんだけで育てている。男性の育児・家事時間、国の調査では平日の育児が24分、家事が24分です。「よみうり子育て応援団」が行った調査でも夫の育児時間は29分でした。乳幼児のいる家庭の父親ですよ。お父さん方が子育ては母親の仕事だと思っている、そういう意識の問題もあるでしょうが、実際には長時間労働が原因です。30歳代の会社に勤める男性の勤務時間は週60時間以上を超える人が20%以上います。週60時間という1日12時間以上働く。それに通勤時間を入れると家に帰ってくるのは夜中ですね。30代というのは、ちょうど乳幼児の父親の年代です。民間企業のベネッセの調査ですが、東アジアの都市、北京、ソウル、シンガポールなどと比較した調査でも、日本はお父さんが長時間働いていて、家事・育児をしていない国です。東アジア、儒教の国の中でも日本の数字が非常に低い。同様に低

いのは韓国くらいですね。つまり、母親がたった一人で子どもを育てるという孤立した子育てが今の子育ての特徴です。ですから、子どもを持つ選択をした女性たちが、子育ての楽しさを実感できないでいる。1日中、赤ちゃんとしか話をしない。マンマとか、プープーとかの言葉しか聞いていないという悩み、自分の苦勞を誰もわかってくれないという悩みが、お母さんたちを苦しめているわけです。

「よみうり子育て応援団」は参加するお母さんたちに事前に悩みを書いてもらって、それを私たちが分析して、悩みをもとに「相談トーク」と名付けたシンポジウムを行う形式です。今までに全国各地で30回開催し、延べ8,000人の方々が参加しました。8,000人の相談に付き合ってきた中で、子育て中のお父さん、お母さんの気持ちがよく伝わってきたように感じます。陰山さんが渋谷で深夜にベビーカーを押して歩くお母さんのことを言われましたが、そのあたりもお母さんにとっては、理由はあったと思うのです。深夜に押しさざるをえない状況が、きっとあっただろうと。もちろん「深夜にベビーカーを押していたらだめなんだよ」ということをどこかで学習することが必要だと思います。キムタクに言われるのも一つだけけど、子育て応援団は、キムタクは呼んでいませんが、そういうことを含めて、少しはお役に立っているかなと思っています。

大谷さんと高垣さんから、自分自身の「不在感」とか「自己肯定感」がないということ、「脅し」と「比べ」の教育、子育てというお話がありました。実は母親も脅しと比べの状況の中で悩んでいるのです。自己肯定感がなくて「私、こんな子育てしていいのかな」と悩んでいます。お母さんにとっても今は辛い状況にあるということで、それをどうしたらいいのか、これから後、お話をしていければと思っています。

荒木 野間先生どうもありがとうございます。3人のパネリストの皆さんに第1回目の発言をしていただきました。3人の先生方の発言を受けて陰山先生からコメントを含めて発言していただきたいと思います。その後、3人の先生方に、これからどうしたら子どもたちが輝く社会をつくっていけるか、提言を含めて第2回目の発言をいただけたらと思います。熱い討論になることを期待しております。それでは陰山先生、よろしくお願いします。

陰山 3人の方々のお話を伺って、慈愛に満ちた子どもに対する思い、熱いものがあるなと思っています。一つ私、こういう立場になって、政治家も会う、官僚にも会う、新聞、テレビの方にお会いすることができて面白いんですね。その結果、一つわかったことは「皆、子どもの幸せを願っている」ということなんです。結構、政治家は真面目に考えているということにびっくりしましたよ、ほんと。文部官僚なんて、すごく、いいしね。なんでこうやって交わりだすと喧嘩になるんだろうというところが不思議なんですけど。一つはへんに高い理想を持っているんじゃないかなという気がするんですね。「かくあらねばならぬ」みたいな。もう一つはこれは今の日本の一番の問題点だろうと思うんですけど、批判から入るんですね。100満点を想定するから、見えてくるのはマイナス何点の部分なんですよ。プラスの部分が見えてこないわけなんですよ。

岡山の早寝早起き朝御飯の大会に行ったんですが、そこで岡山県のPTAの方々がPTA独自に保護者が子どもたちに対して「学校は楽しいか、楽しくないか」というアンケートを行ったんです。「楽しい」「まあ楽しい」「やや面白くない」「面白くない」。真ん中をあえて外して採ったデータです。プラス傾向とマイナス傾向をはっきり採る。「楽しい」「まあ楽しい」を合わせて何%だと思いますか？日本の子どもたち、岡山県では。実はこれが90%なんです。わあ、すごいと思われるかと思いますが、皆さん、そういうアンケートを採られたことがないと思うんです。各地域で採ってみてください。70%を切るところはまずないと思います、小学校段階では。実はほとんどの子どもたちは学校を楽しんでいるんです。実はそういうふうに、きちんと事実を見ていかないと、いろいろと間違ふことがあるんです。よ。



いじめの問題があって、毎日、自殺があると報道があって、大変、悲しい思いをしています、これは、毎年100人くらい死んでいるんです、小中高校生。主に中学生が多いのですが。ほらみろと言われるかもしれませんが、大丈夫、日本の教師も100人くらい死んでますからね、ほんとに。なんせ3万人が自殺する国ですからね、この国は。自殺大国というくらいですから、ほんと。そういうふうに見ていくと、今回のいじめ自殺も、実は「いじめ自殺」ではなく「自殺問題」なんです。この国に生まれて、この国に生きる意味が何なのかということが問われている。だから先程申し上げたように、校長先生の自殺は話題にされないが、子どもの自殺は問題にされる場所があって、そのへんの切り口からおかしいですね。明治生命は面白いアンケートをとってしまして「がんにかかって死にやすい全職業別ランキング」をやっています。一番がテレビ局です。これ2.何倍だったかな。あと1.何倍でね、2倍以上はテレビだけなんですけど。2番が新聞です。3番が雑誌です。全部マスコミなんです。このベスト3がなんで死にやすいか。簡単な話で、医者に行けない順なんです。忙しくて。この間、テレビ朝日とTBSと日本テレビに行ったんですが、その話をしたら皆、リアクションが面白かったですよ。40代前半くらいのディレクターが多いですが、この人たちが全員、一人として過去10年間、人間ドックを受けたことがない。生まれてからほとんど人間ドックを受けたことがない。テレビ朝日のディレクターは「これで死ねれば本望だ」と堂々としているんです。「あの人は確か、この間、心臓にパイプ入れたし、この人はベースメーカー埋め込んでる」みたいなね、話が続々と笑顔で出てくるという恐ろしいことです。こういう人たちに、そもそも「人を大事にするという番組がつくれるのか？」ということを思ったりして。

結構、事実というのをきちんと突き詰めていくと全然違った風景が見えてきちゃうと思うんです

ね。このへん、どこの町を歩いても月曜日でも火曜日でもパチンコ屋って繁盛していますよね。不思議でしょうがないんだけど、どんな田舎に行っても、潰れるパチンコ屋さんはありませんけど、どこかのパチンコ屋さんは必ず繁盛している。ああいうふう生きていける人生もあるし、そんなふうに見ていくと、日本の社会ってずいぶん摩訶不思議な社会だなと思うんですよね。真面目にやっていると思詰まるだけみたいなことを考えたりします。皆さんに後で考えてもらったらいと思うんですけど、「じゃ、どうしたらいいの？」の一言で「ウツ」と思ってしまう。いろんなことを議論大きくして「どうするの？」という時、ものすごく困るんです。議論を大きくしてしまうと。私は大体、答えは見つかったんですけどね。あと皆さんで会場の皆さんもひっくるめて「じゃ、どうするの？」ということ、今晚帰って、明日朝起きてみて、そここのところで答えが見えたら一気に楽になるんじゃないかなという気がするんですが。

荒木 どうもありがとうございます。本日の参加者のみなさんに実践の課題として「これならやれそうだな、こういうことをやってみよう」ということを持って帰ってもらえるとよいかと思います。2 順目は陰山先生の問題提起を受けて、3 人のパネリストの方に「じゃ、どうしていくのか」という視角から問題提起をお願いしたいと思います。まず、高垣先生お願いします。

高垣 いろんなレベルがあるんですよ。僕の話の文脈で言うと「子育てや教育に平和を貫くことができるような社会をつくっていくこと」になるんですよ。「脅し」や「比べ」癖で子育てと向き合うことがなくても済むような環境や社会をつくっていくことになると思うし、個々の教師や親に提案するとすれば、こういうことになるではないかというのがあるんです。

お父さん、お母さんはとても頑張っている。教師も頑張っている。不登校の子どもの相談に来られるのはお母さんですね。不登校の子どもはとじこもっていることが多いですから、相談に来られるのはお母さんです。お母さんに、最初に「ほんとによく、ここまで頑張ってこられたね」というだけでポロポロですよ。僕は熟女を何回泣かしたか（笑い）。何人泣かしたか。「頑張ってるね」と言うだけで「ウワーッ」と泣きだすお母さんもたくさんいらっしゃる。泣かなくても涙ぐむ。頑張ってる子育てしていても、それがあたりまえだから評価されないんですよ。お互いの関係の中で「こうするべき」とか「ああすべきだ」とか言わなくてもいいんですよ。とにかく話を聞いてあげて「よう頑張ってるね」、これだけで、どれだけ親が救われるか。それと同じようにカウセンラーだから言うんじゃないんだけど、話を聞いてあげてください。しんどい人たちの話を聞いてあげてください。子どもの話を聞いてあげてください。話をするというのは、「話す」というのは「手を放す」、放出（はなてん）という地名がありますが、話すということは放すんですよ。自分のしんどいことや辛いことや腹の立つことを話をして、それを誰かにしっかり受け止めてもらったなら、しんどいことや辛いこと、腹の立つことを自分からひよっと放すことができるんですよ。そうすると少し心にゆとりができて、世の中をじっくりと見ることもできる。これは子どもに対してもそうです。忙しい中で子どもの話を聞くことは難しいんだけど、「話を聞いてあげてちょうだい」と。簡単だけ

ど、そういうことを提案します。

荒木 つづいて大谷先生お願いします。

大谷 お配りしたレジュメに「処方箋？」と書きました。「じゃ、どうしていくのか」という問いは、今、多くの人がつきつけられて、イエスかノーか、即答を求められ続けていると思います。子どもたちもそうです。若者たちもそうです。大人もそうです。

それに対する答えになるかわかりません。大切なことは単純です、シンプルです。けれども、人も社会も複雑です。単純でシンプルな答えを私は否定するつもりはありません。でもそこで抜け落ちてくるもの、単純でシンプルな答えによって裁ち落とされてしまったことこそが、人と社会が持つ複雑さそのものです。けれども同時に、人も社会も複雑だからこそ、人は豊かであり、社会も豊かであり得るのです。私はそのことに信頼します。

荒木 とても意味深長な、いろんなメッセージを込めて一言でまとめていただきました。実践としてはとてもシンプルなんですけど、そのシンプルさの背後に複雑な人間関係や社会、そこをしっかりと見ていかないと実践が貧しくなるし、豊かさを欠いたものになる、そのところを丁寧にやっていくというのが教育ではないかということでしょうか。では、次に野間先生からの問題提起をお願いします。

野間 今、子育てが大変だと、お母さんたちがいろんな意味で大変だと言いましたけど、私たちがお母さん方にアンケートを採りますと「子育ては楽しい」と95%の人が答えるんですね。95%は「楽しい」と答えているんです。楽しいのだけど、その楽しさを本当にフルに感じられないというか、楽しいことはわかっているんだけど、なかなかいつも楽しいと思えないことがある。細かいことは一杯あるんですが、一つキーワードとして「子育てが評価される」ということが大事なんですよ。評価というのは例えば、夫からの「大変だね、よく頑張ってるね」という言葉もそうですね。「自分は子育てを直接はできないけど、だけ頑張ってるね」というメッセージが夫からあれば、「自分は評価されている」という思いになるのですね。いろんな意味で子育てが評価されていると思えば、子育ての楽しみが実感として感じられるということだと思います。私も大昔、子ども二人を連れて外出して百貨店のエスカレーターの前でパッと立ち止まったことがあるんです。うまく乗れなくて。その時、「モタモタするな」と怒鳴られたんです。怒鳴った人は今の私と同じくらいの年齢のおばさんでした。その人も子育てした経験があると思うのですけれどね。その時、私は辛くて「自分が悪かった。階段を使うとか、エレベータを探すとかすればよかった」と思ったんですが。そういう辛い思いをしたことはずっと覚えています。

他の新聞ですが、子育て中のお母さんに「何が一番うれしかったか」と聞くと「ビルのドアを開けてくれたこと」が一位だったんですね。ベビーカーを押してビルのドアを開けられないですね。

自動ドアも増えましたけど。その時に開けてくれるということが一番うれしい。また、ある新聞の読者投稿欄に、全然見ず知らぬおじいさんから『あなた、子どもを育てていて偉いね』と言われたのがうれしかった」という投稿もありました。私たちはそんな難しいことはできませんが、たとえば赤ちゃんがいたら笑顔を見せてあげるくらいはできます。それだけでも、ずいぶんお母さんは気持ち楽になって、子育てが楽しいと実感できるのではないのでしょうか。

少子化という、先進国が初めてぶつかる難問、難題。少子化という環境の中で育つ子どもは、どういう大人になっていくのかが、一番、私が興味を持っている問題でもあります。遊び場も友だちも、少なくなり、いつも大人に監視されている環境の中で、子どもがどうやって育っていくのか、教育の問題についていろんなお話がありましたが、少子化の中で育つ子どもの将来が大事だと思います。そういう意味で立命館大学産業社会学部の中に子ども社会専攻という研究の場をつくられることは喜ばしいことだし、大変期待しております。

荒木 どうもパネリストのみなさんありがとうございました。基調講演とパネリストのみなさんの主張を少し整理した上で、フロアのみなさんからの質問をお受けしたいと思います。

一つ目は、陰山先生が基調講演の中でいろんなデータを使ってお話をされましたが、間違いなく社会の変化と子どもの教育、子育てとはつながっているということは共通認識となったのではないかと思います。不登校の問題、いじめの問題、非行の問題、社会の鏡としての子どもということを通通の土台にすることができたのではないのでしょうか。子どものところに、その時代や社会が健康に進んでいるのか、危機的な状況にあるかが現れてくるだろうという視点はとても大事だと思います。

二つ目は、今回のシンポジウムの企画主旨とも関係するのですが、少子高齢化という日本の現代を踏まえながら子ども社会をどう考えていくかです。野間さんが触れられたように、少子高齢化の方向性はもうわかっていることなんです。社会がどちらの方に動きだしているのか。そこには一定の法則性がある。そういうことをわかった上で、大人や政治家も含めてどういう対策を立てるか。これは研究者に求められる課題であると同時に、実践家に求められる課題でもあろうかと思いません。

家族や子どもたち一人ひとりに対応した具体的な課題解決の方向性が求められるわけです。いろんな立場から発言がありました。基礎学力、あたりまえのこと、自分を大事にする自己肯定感、大事なことは意外に身の回りに、簡単なことの中にその真実が隠れているという指摘などです。しかしそれを一面的に強調すると、それについていけない人とか、そのことによって問題が見えなくなってしまうこともあります。わかりやすくシンプルに言うことと、丁寧に取り込むことを、どう統一させるか。教育者、臨床家、子育て相談の場におられる方が、一人ひとりの問題を丁寧にきいて、具体的に答えるという対人援助のスキルや技術も求められてくると思います。このようなことを問題提起として受けとめました。それではフロアからの質問をお受けしたいと思います。

（質疑応答）

質問 陰山先生のお話やパネリストの皆さん方のお話を伺って、家庭の問題が大きな要素になっている。「小1プロブレム」とおっしゃいました。地域の幼稚園の園長さんの話を聴きますと、「今は小1ではないですよ、2年保育の幼稚園からですよ」と。家庭教育の問題が大きな要素だと思います。陰山先生は生活習慣だとおっしゃいました。家庭教育の問題で、30年前からの中教審、臨教審の答申でも項目として家庭教育は採り上げられていますが、具体的な家庭教育充実の方策が示されていないように思います。教育基本法の問題についてはそういうところが含まれていると聞いていますが、家庭教育を充実させていく方策はどういうことをやっていけばいいか。ご意見等伺いできればと思います。

質問 陰山先生の基調講演は参考になりました。僕自身もすごくひょんなことから考えさせられてきたんですが、子どもが生きていくにあたって何が最も大切であると考えているか、何を学んでほしいと考えるか。陰山先生の著書で「基礎学力だ。教育再生とは生活習慣の再生である」と言われますが、日本の学校教育は道徳教育を叫び続けているけれども、逆に他に頼っているのではないかと基調講演でおっしゃったと思います。僕は個人的には学力も大事だけど、内面を育むことも大事だと。教えることも大事だけど、本当に教育において学校教育で大事なのは育むことではないかと思うんです。子どもが生きていくにあたって何が最も大切か。学校教育において何を最も学んでほしいかということを探りたいと思います。

質問 大人になりきれてないなと思いながらこの学校を卒業していく者ですが。サブタイトルに「現代社会のあり方を子どもの視点から問う」とありますが、子どもの視点というのは具体的にはどのような視点なのか、ぜひパネリストの方々にお聞かせ願いたいと思います。卒論にも参考にさせていただきますので。

質問 立命館3回生で教師を目指しています。現状とこれからの日本の教育の展望を踏まえて、これから求められる教師とはどういうものかをお聞かせいただければと思います。

質問 「子どもが輝く社会とは」という観点から、立命館大学としてはどういう方向で進めていかなければならないのか。立命館大学はここ10年で1,000名を超える教員を全国に送り出している。今、世の中は製造責任が問われる時代になってきました。教員の製造責任ということが問われることもやむをえないと思います。その場合、「しなやかな教師」が求められていると思いますが、「しなやかな教師」より「したたかな教師」が必要なかもしれません。そういう時、立命館として考えなくてはいけないのは、教員の養成の根本的な対応の問題と、もう一つは社会に送り出した教師のアフターケアの問題を疎かにできないと思います。40代、50代になって潰れる先生が多いです。そういう先生の新卒の時代を見ると目が光っていた。それがどうして腐った魚の目になってしまっ

たのか。教師社会、教師養成社会がどのような責任を果たすべきかということがこれから問われてくると思います。

質問 6歳と3歳の男の子の母親です。子育て真っ最中ですが、6歳の子どもを週4回、お稽古に行かせています。帰ってきて宿題とお稽古の練習で忙しい日々を送らせていまして、高垣先生の親の期待とか、大谷先生のお話を聞いて心がいたんで、うちの子どもが中高で不登校になるのでは、ひきこもりになるのではないかと不安になっています。子どもの評価で母親が評価されることが多々あると思います。子どもが、どこの学校を出たとか、何かできるとか、しつけができていくということで母親が評価されるものですから、高垣先生のように、子どもに期待しないで、子ども本位で行けばそれでいいのか。期待をしない方がいいのかどうか、今日はわからなくなっていますので、そこのところよろしく願いいたします。

質問 高校教員をしています。25年前に本学で製造された教師です。45歳です。「子どもが輝く社会」というのは大人も輝く社会で、その意味で言うと少子化の問題と絡みますが、大人の働き方、生活の仕方はずいぶんひどくなってきています。ある意味では政策的につくられているところもありますので、政治の責任も大きいと思います。高校生を教えていますので、陰山先生の言われたように事実を突き詰めることが大事だと思います。高校生ですからある程度わかる。子どもと一緒に現実に起こっている事実を突き詰めて考えていく。大人も一緒に考えていく。今、起きている問題をどう考え、どう解決していくかということを生徒たちとともに考えていくことが、教師のスタンスとしては大事だと思います。

質問 不登校、ひきこもり、ニートの問題にかかわっている地域のNPO団体です。日々子どもたちの苦しさを聞いて生活していますが、地域という視点で学校と地域を結んでいくことが大事ではないかと思います。今、考えておられるのは大学ですが、各大学が子育ての考え方について、子どもに対する視点を持ってほしい。そして各地域でボランティアをやる青年たちを育成していただきたい。アメリカでは災害があればすぐボランティアで助けるということが行われています。私たちとしては一刻も早く、そういうものをつくっていききたい。隣のおばさん、おじさん、団塊の世代とか力がありますので、今後、地域に教育の成果を還元していただきたい。そういう教育を生ものものに、生きているものにしていただきたいと思います。

荒木 たくさんの質問ありがとうございました。質問には先ほどと逆の順番でパネリストの先生方にお答えいただこうかと思います。まず、野間先生おねがいします。野間先生から順に一言ずつ、どの質問に関わってお答えいただいても結構です。ご意見をいただく形で発言をお願いします。

野間 「大人が輝く社会でないといけない」とおっしゃいましたが、全くその通りです。少子化の話の中で、今の若い人たちが出産、子育てを避けていると言いました。実は今の社会が、出産、子育てを避けているのだと思います。出産、子育てをしない方が社会的に効率がいいから。そうした側面があるのではないかと思います。まさに政治の責任、社会の責任が大きい。30代の子育て世代が長時間労働であるということで、かなり企業も本気になってきています。次世代育成支援対策推進法が施行されましたし、仕事と生活のバランス、ワークライフバランスも言われるようになりました。仕事をしつつ子育てができる。母親だけでなく父親も、子育てしていない人も調和の取れた働き方、生き方ができる。ぜひそうした方向に国も企業も進めていってほしいと思います。子育て支援の問題は子育てをする人たちの問題だけではなく、今の社会を見直すきっかけでもありますし、そういう視点が大事ではないかと思っております。

大谷 すべてのご質問に答えることはできません。「最も何を学んでほしいか」。大切なことはシンプルだと言ったと思います。大切なことは「人は生きていていい。私は存在していい」。そういう安心感を自らの心身に刻み込んでほしい。教師はその安心感を子どもたちに育んで欲しい。そのためにも、その安心感を子どもだけでなく大人自身が心底で実感できること、それが単純でシンプルな、もっとも大切なことです。「求められる教師像」については、質問された方が、まさに私が答えようと思っていた二つの言葉をおっしゃいました。「したたかで、しなやかな教師」です。この難しい時代を生き抜くことのできる「したたかさとしなやかさ」を持つこと。先ほども申し上げたように、大切なことはシンプルだけれど、人と社会は複雑です。けれど、人と社会がもつ複雑さを認識し、それゆえの豊かな可能性に信頼して一つひとつ丁寧に粘り強く関わっていくことが教師には求められています。しかしこれは教師だけではなく、大人も子どもも、したたかでしなやかであることが、人が生きてゆく、存在していける根源的な力になるのではないのでしょうか。

高垣 私が今、実践していることを言いますね。「ゆっくり歩く」。そうすると、自然にゆったりと「いま、ここ」にくつろいでいられるような心境に自分を持っていける。それがとても大事だと思います。私たちの心は未来に飛んで不安になったり、過去に行って後悔したり、未来と過去の間を右往左往している。「いま、ここ」を大事にする。そうすると今、大谷さんが言われたように「今、自分が存在してもいいんだ」という感覚が蘇ってくるのではないか。今は脅しと焦りの心の状況で多くの人たちが走らされていますので、それにまず歯止めをかけるために「ゆっくり食べる、ゆっくり寝る、ゆっくり歩く」。これがとても大事だと思います。それだけちょっと提案させていただきたいと思います。

陰山 家庭のことは高垣先生がおっしゃった通りです。データ的に見るとはっきりして「子どもは9時までに寝させる。大人は7時間以上の睡眠をとる。それを実現する社会にする。それを実現することを阻む奴が抵抗勢力だ」という話であります。そのへんははっきりしていると思いま

す。

私がさっき「どうしますか?」と言った時、これはもう答えで出てきていることなんですね。つまり「子どもを幸せにしたかったら自分が幸せになればいい」だけの話ですよ。親が幸せな人生を生きているかどうか。そうなった時、「自分はなぜ幸せに生きられないんだろう?」と考えた方が実は早いんです、子どものことを考えるよりは。そうすると「なんでこんな7時のニュースが見られないんだろう」とか、そうなった時、一人労働組合じゃないけど、「今日は帰る。7時のニュースを見る」ということを実際にやるべきだと思うんですね。私は、学期に1回は必ずの休みをして、ゆっくり寝ころんで人生を考えるみたいな日をとっていました。土日は家族サービスもありますのでね。ところが普段の日に教師がずる休みをしているのかと思うわけじゃないですか。しかし自分にとって必要だったら、やればいいだけのことだと思います。大体、世の中、なんでそれを批判するかというと「いい教師は休まないものだ」という物差しがあるわけです。誰が決めたんやという話ですね。ここなんですよ。つまりある一つのあるべき価値観というもの、日本はものすごく安易に物差しが入ってしまう。まさしくその物差しで計られるから校長先生の自殺はたいしたことじゃないんですよ。子どもたちの自殺はめちゃくちゃ大きいんですよ。ところが命が平等であると冷静に考えればわかることなんだけど、それよりも物差しの方がストーンと今の日本の社会には入ってしまうという、このことを考えなければいけない。自分たちの頭の中に鎖がぐるぐる巻きされているんですよ。かつて古代においては鎖は足に巻き付けられて強制労働させられたけども、今はその鎖は目に見えず、頭の中にある。「働かないといかん」と思っている。実は働かなくてもいい、帰ってもいいのに隣の人が帰ってないから帰りにくい。そこがおかしいのであって。

「自分の幸せは何か。この世に生まれた意味は何なのか。この国に生まれて生きる意味は何なのか」という答えを親が持たないといけない。それを家族に適応しなければいけない。それを子どもたちに教えるべきではない。先程、週4回、お稽古に通わせているということで、それでお母さんが嬉々として喜んで「うちの子、ピアノができた」と喜べるうちは、ほとんどむりはないと思います。そこで、もし今日の話聞いて「これはまずい」と思ったら、これはまずいわけですよ。ただね、最も重要な答えは本当の物差しの答えはお子さんが持っているはずなんですよ。お子さんをきちんと見られていたら、週4回の習い事がいいか悪いかの判断ができると思います。もうその判断が間違っているとすれば、これが一番ヤバイわけですよ。つまり最初申し上げたように、改革すべきは現場、自分にあるんですよ。人を批判する必要はない、自分が反省すれば。批判をやめると気が楽ですよ。人の批判をしないでいいのは気が楽ですわ。批判されることがなくなりますからね。大体、よく批判される人は人を批判する人です。批判しないとずいぶん楽。それでも批判される場合、あるじゃないですか。その時はいい方法があるんですよ。耳を塞ぐ(笑い)。我慢する。私も立命に来る時は公立を裏切ったとずいぶん叩かれましたよね、ほんとに。耳を塞いでいましたけどね。そういうことが重要ではないかなと思います。

それから学校でやるべきこと。学校で何をやるか。私はこういう定義をしております。日本国憲法が私たちの生活すべてを規定していますよね。平和と民主主義も日本国憲法が起点です。そんな

ると私たちは子どもたちに何を教えるか。私はこう考えます。日本国憲法は三大義務を課しています。「義務教育」と「勤労」と「納税」です。ということは勤労と納税ができるように教育をすること、これが義務教育の基本ではないでしょうか。

立命館が教員養成課程を持つことの意義。これは私自身の希望なのですが、教育学が学園の背骨になっている学園って、ありそうでないでしょう。どこかの大学と言うと経済学部が中心、政治経済、法律とかが中心だったりするんだけど、教育学が背筋になっている学校法人はないような気がするんです。これってケツタイだと思うんです。つまり哲学とか倫理学、化学、物理もひっくるめて、それらがすべて集約されて次の世代に受け継がれていかないと発展していかないわけです。まさしくすべての学問は教育の中に集約されていかないといけない。産業社会学部の子ども社会専攻を一つの核にしなが、もっと幅広い教育を司るセンターが機能して、立命館教育学科みたいなものをつくって、卒業してからもアフターサービスするとかなくなってくれたらいいのではないかと、個人的な希望として持っています。

今、一番大きな問題になっていると思うのは、ジャパニズム対グローバリズムですよ。先程言ったようにプロ野球ですわ。ものすごく象徴的です。プロ野球はアメリカの大リーグの球団が増えすぎて経営が成り立たなくなっている。スター選手がいなくなってきた。選手が足りない。グローバリズムは勝手に目先の利潤を追及して我体をでかくして、足りなくなったら世界中からかき集めてくる。アメリカだけが、なぜか急速に成長して行って日本からも出でいくようになっていく。そんな気がするんですね。そうなった時、「私たちは私たちの社会として私たちの子どもたちを一体、何人に育てるの？」という。英語のことを申し上げましたが、日本語を徹底的にやって日本を大切にするという精神もひっくるめて、日本の社会のことも考えて、それをきちんとアジアの中でも位置づけるために英語をやりましょうということを申し上げているわけです。私たちの社会を豊かにするために何が必要なかをきちんと考えると、今の社会はおかしい。企業もおかしいじゃないですか。成果主義とか言って目先の利潤ばかり追っ掛けて株価を上げることを突き詰める。十数年前までは、会社というのは一企業の社員を豊かにするっていうことを言っていたじゃない。社長は「私の判断に社員何人、家族までひっくるめて何千人の人生がかかっている」と言っていたじゃない。今は株主の方ばかり向いて目先の利益を集めないといけない。その利益は最終的に全部アメリカに行くような仕組みになっているわけじゃないですか。これがグローバリズムなんですね。私たちが働いた対価を私たちの家族のために使うという、極めてあたえまえのところに戻していかないといけないと思うけど、体のいい言葉や論理によって大事なものがヒューツと海を超えていってしまうように思うのは私だけですかね。何とか井川、阪神タイガースでやってほしかったと思います（笑い）。

荒木 最後に簡単に本日のシンポジウムのまとめをさせていただきます。

今回「子どもが輝く社会とは」ということでシンポジウムを開催させていただきました。子どもの視点から社会を考えていこうと企画したわけですが、どうも子どもの視点だけではなく、大人の

視点、働いている人の視点、学んでいる人の視点も大事であるということがいえるかと思います。子どもが輝く社会とは、一つの視点ではなく、複眼的な視点で総合的に見ていくことが大切なんだなということを今日のシンポジウムの中で強く感じた次第です。特に働くこと、家族を養うこと、関係をつくっていくこと、社会科学や社会問題と子どもの輝きとが密接につながっていることを強く印象づけられました。

もう一つの論点として、子育て中のお母さん、高齢者というのは社会の中ではどちらかという弱者という位置づけがあるわけですが、こういうところに社会の矛盾が起こりやすいということですね。それはたとえ社会の出来事の1～2%であっても大きな社会の変化を予測する側面があるということですね。しかし逆にそこを強調しすぎると社会の全体像を見失ってしまいがちになる。大きいことと、小さい変化の両方を見ていく視点、これが重要です。エビデンスが大事であるという指摘がありましたが、事実を踏まえて考えていく時に、この視点が大事になるのではないかと感じた次第です。

その他いろいろな論点があったかと思いますが、以上2つの点を本日のシンポジウムの確認点とさせていただきます。本日は日曜日の午後、忙しい時に、多数のみなさんにご参加いただきましてありがとうございました。

景井 長時間ありがとうございました。来年度から私は人間文化学系から子ども社会専攻に移籍いたします。荒木先生の総括で語り尽くされていると思いますが、子ども社会専攻の側から一言だけ申し上げたいと思います。今日の話、ずいぶん熱のこもった議論で勉強になりました。心構えをつくる上でもありがたかったと思っています。

個人的に考えたことも含めて申し上げますと、今日のキーワードの一つは「不在」であったかなと思います。さまざまなものの不在ということが言えるのではないかと思います。高垣先生の指摘された「自己肯定感の不在」、大谷先生が危機感を抱いていらっしゃる「いのちの尊厳の不在」、さまざまな形の不在が一つの問題として語られました。一方では90%以上の子どもが「学校は楽しい」と思っているという事実はあるにしても、他方にはさまざまな「不在」が存在している。今日の議論に即して言えば、社会学というのは、「不在」を日本の近代化のありように即して解明していくことを一つの仕事にしてきた面があります。提言については、アカデミズムの性格もあってあまり踏み込んでこなかったという経緯も確かにあります。

「不在」ということで思い出したことは、中島梓さんの『コミュニケーション不全症候群』（ちくま文庫）です。授業で3、4年前に使いましたが、この本全体のテーマは「他者への想像力の不在」と総括できると思います。この本の中で最も印象深かったのは、他者への想像力を欠いている人たちについては、実はその人たちを責めても仕方がなくて、「他者への想像力を欠如させている人たちは、そもそも彼ら自身、人としてまともに扱ってもらったことがないんだ」という趣旨の言葉でした。その本のその部分を読んで、「これはぜひ学生に伝えたい」と思って授業に採り上げ、半期べったり使ってさまざまな議論をした覚えがあります。「不在」ということで思い出したのはそのこ

とでした。さまざまなものが「不在」である状態をつくってきたのが日本近代の歴史であったと総括していいのかなと、思いました。

では社会学はどうしたらいいか。社会学はアカデミズムの一分野ですから経験的な仕事をします。ですのであまり未来予測はしないことになっていますが、教育という仕事に携わり、教員養成するとなると話は違ってきます。製造物責任という言葉も出ていましたが、実際に世の中に教育という形でかかわりながら責任をとっていかないといけない場合、どうするか。私は学部の授業で「自我論」という聞き慣れないタイトルの講義を担当しています。今年は「自尊心」をテーマにして話をしています。講義の準備をする中でさまざま調べたんですが、日本人の著者が標題に「自尊心」を掲げている本は限りなく皆無に近い状況でした。心理学の世界でも「自尊心」をテーマにしている研究は、実にお寒い。ほとんどありません。社会学もそうです。これは一体どうしたことかということから今年は講義を始めて、学生とコミュニケーションペーパーでやりとりとりしながら考えています。講義の最初の時間に学生に書いてもらったコミュニケーション・ペーパーでも、「自尊心」のイメージは大変ネガティブなものでした。高垣先生がおっしゃった「自己肯定感」という言葉に近いと思いますが、「自尊心」という言葉をキーワードにして考えてみますと、「自尊心」というのは、「応答を引き起こす力」の感覚だと言えます。他者に対して働きかけ、他者からの応答を呼び起す。他者から応答を返してもらう。環境に対する影響力を確認するということで、実は「自尊心」のスタートが切られる。自尊心というものは、他者から応答を返してもらえる自分の存在と行為への信頼であると言えるわけです。それは赤ん坊がお母さんからおっぱいをもらっている時期から始まっている。ほとんど生まれた瞬間から赤ん坊は周りを認識していることがわかってきていますが、他者からの反応を獲得する、その獲得の経験の蓄積が自尊心の根柢になっているという議論を、講義では紹介しています。ここから我々が引き出すことができる実践的な指針があると思っていて、学生にそれを伝えているのです。子どもたちに自尊心を身につけてもらおうと思った場合に重要なことは、単純に言えば応答を返すことなんです。的確な応答を返すこと。

しかし、我々は、何かしようとするとは他者を受動的な状態に置いてしまいます。教室でも、学生を受動的な状態に置きっぱなしにしている。そうやって「自尊心を持てるようになれ」と言っても、それは無理だろうと、私は根本的には思っています。学生に自尊心を持たせようと思えば、子どもたちに自尊心を持たせようと思えば、的確な応答を返すこと。先に申しましたような意味での子どもたちの信頼感こそ、彼らに存在感を与えていくのだと考えています。そういう文化を実は日本は叩き殺してきたのだと思っています。そういう文化をまた新しい形で、自尊心を持って人が生きていくことができるような、自分を肯定して自尊感情を持ちながら生きていけるような応答の文化をどうやってつくっていったらいいかというのが、子ども社会専攻の最大のテーマだと、私は思っています。

「人文から子ども社会専攻に行かないか？」と言われて、ホイホイと尻尾を振って来ることにしたのは、こういうことを実際に実践してみたいという思いもあったからです。新専攻の教員のメーリングリストで議論していますが、「骨太の教員をつくろう。教育の現場で潰れない骨太の教員を

つくろう」という話をしています。個人的には、まず学生たち自身に自尊心を持たせたいと思います。そしてまた、子どもたちに自尊心を持たせることのできる先生になってほしいと思っています。そのような先生を作りたいと考えています。徐々に情報の共有も進めながら話をしておりますので、皆さんのご期待に添えるような仕事ができればと、意欲を高めているところです。本日はお忙しい中、長時間にわたって御参加いただきました。どうもありがとうございました。